

## 故 友岡學先生の人と業績

舟 越 耿 一

1. 故友岡先生の思い出
2. 故友岡學教授功績調書
3. 故友岡學教授業績一覧

### 1. 故友岡先生の思い出

長崎大学教育学部教授友岡學先生は、去る1990年12月5日午前7時30分、長崎大学医学部附属病院にてご逝去されました。享年60才、まことに急なことであり、いまだに無念の思いが消えません。

友岡先生のご葬儀は、同年12月5日、由緒ある諫早家の菩提寺・天祐寺で厳粛なうちにとり行われました。土山秀夫長崎大学学長をはじめ長崎大学の評議員、各学部の学部長、部局長、また野田郷諫早市長といった方々の御列席があり、友岡先生の長崎大学や地方自治体への多大なご貢献を伺わせるに十分なものでありました。

葬儀次第の中では、武藤雪下教育学部長が学部を代表されて、また外山幹夫教授が教育学部社会専攻を代表されて、それぞれ心のこもった弔辞を読み上げられました。また友岡先生のゼミナールの卒業生・横尾治道氏（千代田火災海上保険株式会社）が卒業生と在校生を代表して弔辞を述べられました。友岡先生の遺影を見すえながらの哀悼の念あふれる弔辞は、参列者に在りし日の先生の生活と御人柄を偲ばせました。

後掲の業績一覧に見られるように、友岡先生は実に旺盛な研究活動を展開されましたが、始めは農業経済から出発され、その後経済史を経て経済原論および経済哲学に関心を移していかれました。この頃の先生の御研究の基本的方向は、独自の立場からマルクス経済学で用いられている諸概念を検討し、経済学のカテゴリーをイデオロギー的要素から解放することに向けられていました。その御研究を踏まえて、先生は現存する「社会主義」に対する根源的な批判へと進んでいかれます。マルクス経済学の豊かな学殖に立った「社会主義」批判の論理はきわめて鋭利であり、今日の東ドイツの西ドイツへの吸収併合、ソ連邦解体、東欧諸国の下からの革命といった激変の事態は、先生の「社会主義」に対するご慧眼をいかに証明することになったように思われます。御存命であるならば、この激変の底流とその行方についてたくさんの論稿をものにされたであろうと思われ、その損失の大きさに憤怒を禁じえません。

また先生は、九州各地の地域経済の調査研究にも貢献されました。特に長崎県における「新空港と地域開発」の調査研究は関係者の注目を引き、これが機縁となって長崎県総合開発審議会専門委員会の一員に選ばれ、県の長期計画の策定にあたられました。その後も諫早市、大村市、野母崎町の振興発展のために多大の貢献をされたことは周知のところで

## 故友岡學教授追悼（舟越）

す。

友岡先生の思考は、常に大局的であり、また合理的で、鋭利でありました。鋭敏な思考と沈着冷静な御人柄は随所に見てとれたのですが、ひとつには長崎大学学生部長として、長年懸案とされていた学生会館問題や教育学部寮問題の大胆かつ鮮やかな解決という御仕事の中にそれは現われました。またひとつには囲碁・将棋の高段者として、あくまでも寡黙で、その容赦のない打ちっぷりは、対局者を幾度となく絶望の淵に沈めたものでした。私はこれらの御姿のなかに、友岡先生の非凡な風格を感じさせられ、また乱世の雄たる資質を勝手に想像していたものでした。

思い返せば、友岡先生は長く病氣と闘っておられたような印象もあります。教授会の間中お腹を押さえて痛みに耐えておられた姿が目には浮かびます。しかしこの病氣は十二指腸潰瘍の手術で克服され、その後はすっかり元気になられたとっていました。その友岡先生に新たな病魔がしのび寄っていたなどとはついぞ想像だにしませんでした。亡くなられた年の夏には、子どもさん達といっしょに九州各地にドライブされたという話も伺っていました。

しかし8月末、せきが出て風邪の症状が顕著になりました。そして月半ばに諫早病院に入院された時にはすでに肺癌の診察結果が出ていました。若い頃肺の部分切除をされていた先生にとって、肺癌は思いも及ばなかったことでしょう。ですから、友岡先生はベッドで学生の卒論指導を続けておられました。10月に長大附属病院に転院されましたが、残念ながら病状は回復はおろか急速に悪化の一途をたどってゆきました。唯一の慰めは、肺癌特有の激痛に見舞われることがなかったということです。しかし、人生80年の時代に、なんとも無念やるかたない急逝でありました。その悲しみと怒りは決して和むことはありませんが、今はただ友岡先生のご冥福を心からお祈りするばかりです。

## 2. 故友岡學教授 功績調書

先生は、昭和5年5月18日大分県に生まれ、昭和28年3月九州大学経済学部を卒業後、直ちに同大学大学院経済学研究科修士課程に進学し、昭和30年3月同修士課程を終了後、引き続き同博士課程に進み、昭和33年3月に同博士課程を単位修得退学の後、同年4月九州大学経済学部助手として採用されました。

その後、昭和37年4月鹿児島県立短期大学講師、昭和41年8月同短期大学助教授を経て、昭和43年4月長崎大学教育学部助教授として赴任し、昭和49年4月同大学教授となり、教育・研究に専念されていましたが、平成2年12月5日肺癌のため他界されました。

この間先生は、経済原論・経済学の研究・教育に務め、小学校及び中学校の教員養成に多大の貢献をされました。

先生は多数の著書及び論文を発表されていますが、その研究業績の中心は、前近代・資本主義・社会主義の経済体制論と、そこにおける経済学的基礎概念の考究にありました。前近代については封建的土地所有、近代、共同体論等、資本主義については商品・貨幣、企業・利潤、利子、物価、競争・独占、福祉等を論究し、社会主義については市場経済の

導入をはじめとした多様なディレンマの解明に幾多の新しい知見を加えられました。

その研究の特色は、原理論的考察が徹底されていると同時に、常に現実の政治経済社会の状況が厳しく踏まえられている点にありました。とりわけ現存した「社会主義」経済体制に関する分析と批判は、早くから専門研究者の注目を集めていました。今日のソ連邦の解体や東欧諸国の新事態は、その分析の正しさと先生の慧眼を証明しているといえます。

また先生は、学内にあっては、昭和51年4月から同55年3月まで、2期にわたって長崎大学学生部長を務められ、その間、長く閉鎖されていた学生会館の開館を果たされるとともに教育学部学生寮の円満な閉寮を行われるなど、長崎大学における重大な懸案事項の解決に尽力されました。さらに、昭和58年7月から同62年6月まで、2期にわたって長崎大学評議員を務められ、大学全体の運営・発展に多大の貢献をされました。

教育学部にあっても、昭和62年5月には教育学部長事務代理を務められたほか、予算委員会委員長、教育学部大学院準備委員会委員長の要職を歴任されるなど、学部の運営と発展に誠に多大な寄与をされました。

さらに先生は、長崎県下における地域社会の発展のために幾多の貢献をされました。同県大村市、諫早市、野母崎町の各振興計画の立案策定を主宰され、極めて有益な報告書の提出が行われています。また、先生が居を構えられていた諫早市においては、昭和48年9月以来、同市振興計画審議会副会長、同57年4月以来、同市小中学校通学区審議会会長、同63年1月以来、同市近代史編集委員会委員を務められるなど、同市の発展に深く関わるとともに、平成2年3月以来長崎文化放送番組審議会副委員長も務められ、マスコミ文化の向上にも寄与されました。

以上のように、友岡先生は、研究・教育の面において優れた業績を挙げられるとともに、長崎大学及び同教育学部の発展に深く寄与され、さらに地域社会の生活・文化の振興発展にも並々ならぬ貢献をされ、その功績はまことに顕著であり、この生前の功績を讃え、平成2年12月25日付けで正4位勲3等旭日中紋章が授与されました。

### 3. 故友岡學教授 業績一覧

著 書		
遠賀村農業の姿	福岡県遠賀郡遠賀村	1957
北九州五市合併と遠賀郡の将来	九州経済調査協会	1962
筑後川上流地域経済立地調査報告書	九州経済調査協会	1969
— 地域農林業の現況と展開の基礎条件		
新空港と地域開発	大村地域総合開発研究会	1970
明日の諫早市の造形	諫 早 市	1973
— 諫早市振興都市調査報告書		
九州三県にみるUターンの動向	九州・山口経済連合会	1974
— 長崎・宮崎・鹿児島		
自然の魅力そして人の和	長崎県西彼杵郡野母崎町	1977
— 野母崎町町勢診断報告書		

故友岡學教授追悼（舟越）

明日に羽ばたく大村市 — 新基本構想の課題と方策	地域問題研究会・長崎県大村市	1982
論 文		
水害と政治—西日本水害の調査報告	改 造	1954
中世史研究に関する若干の覚書	経済論究（九州大学大学院経済学会）	1957
封建的土地所有の論理 — 共同体論との関連において	経済学研究（九州大学経済学会）	1958
封建地代の非地代性 — 共同体論との関連において	経 済 論 究	1961
経済学への提議 — 基礎的諸概念の再検討(1)	商経論叢（鹿児島県立短大商経済学会）	1962
経済学への提議 — 基礎的諸概念の再検討(2)	経 済 論 究	1962
経済学への提議 — 基礎的諸概念の再検討(3)	鹿児島県立短大紀要	1962
経済学への提議 — 基礎的諸概念の再検討(4)	同	1963
共同体ということ — ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—	経済・経営研究（九州経済学会）	1963
価格と市場	商 経 論 叢	1963
日本中世世界の時間・空間的構造 — 永原慶二理論批判（上）	歴史と現代（九州近代史研究会）	1964
日本中世世界の時間・空間的構造 — 永原慶二理論批判（下）	歴史と現代	1964
平和共存の思想と条件 — その経済学的歴史学的接近	商 経 論 叢	1964
商品と貨幣— その同伴と対立	鹿児島県立短大紀要	1964
企業と利潤	商 経 論 叢	1965
貨幣的経済理論批判— 貨幣への序章	経 済 論 究	1965
経済学における私有財産の問題	商 経 論 叢	1966
地代論における経済外的要素	農業経済論集（九州農業経済学会）	1966
経済体制についての一考察	商 経 論 叢	1967
物価論反省	長崎大学教育学部社会科学論叢	1969
南北問題解決は国家体制廃棄で — 自由，平等，連帯にもとづく世界的な福祉対策を	世界研究（世界連邦建設同盟）	1969
競争・独占論	長崎大学教育学部社会科学論叢	1970
ノーコントロール・アンド・ノーサポート — 教育費についての一見解	長崎大学教育学部社会科学研究報告	1970
科学・技術概念の一般化	商 経 論 叢	1971

経済プロセスとしての教育	商経論叢	1971
受益者負担原則考	経済・経営研究	1972
雇用構造について	同	1973
良貨が悪貨を駆逐する	長崎大学教育学部社会科学論叢	1973
都市と国家についての原理的一考察	長崎大学教育学部社会科学論叢	1974
公私分明論	同	1975
福祉を市場に探る	同	1976
二つの経済学的世界像	同	1979
賃金労働者階級考	同	1980
マルクス利子論のジレンマ	同	1982
個体と類の関係について	同	1983
人間と交換	同	1984
経済学における政治言語	同	1985
社会主義——その壮大な錯覚の由来	同	1988
市場経済は社会主義に入り込めるか	同	1989